

街路樹

学力向上に向けて 35

知っておきたい子育て ～エリクソンの「人間の発達」より～

学力向上を支えるものとして、生活習慣や学習習慣などの広い意味での学力があります。今回は基本的な生活習慣はもとより、人間として生きていくために必要な発達課題とともに、子どもの自発性や社会性などを育てていくためのポイントをご紹介します。

① 乳幼児期(0～1歳)「基本的信頼感」を身につける時期。

乳児は「愛せるだけ愛せよ。」母親など養育者から世話をされ、守られる中で心地よい信頼感を獲得します。この経験が他者や自分に対する信頼感を生み、生きていくうえでの安定基盤となります。赤ちゃんは愛されることで、人や自分を信じられるようになります。

② 幼児期前期(1～3歳)「自律性」を獲得する時期。

自力で目的場所へ行く「歩行」力や、自分の気持ちを伝え他者を理解するコミュニケーション手段としての「言葉」を体得する時期です。これらが子どもを能動的にさせ、自律性を養います。我慢したり、頑張ったりする「しつけ」の始まる大切な時期でもあります。

③ 幼児期後期(3～6歳)「自発性」を獲得する時期。

遊びを通して興味や関心を膨らませ、意欲的になります。それが抑制されると反抗心が現れます。のびのび遊ばせて豊かな感性を培うことが大事な時期と言えるでしょう。そのエネルギーが子どもの長い人生において、生きる意欲のもとになっているのです。

④ 児童期(6～10歳)「勤勉性」を身につける時期。

子どもに合った課題を与え、それが成功体験になるよう援助し、成就感、達成感をたくさん体験させることが必要です。失敗しても何とかかなという感覚の習得も大切です。言葉や数を急速に獲得する時期でもあるので、認知力の発達を理解しておきましょう。

⑤ 思春期(10～18歳)「自我同一性」を獲得する時期。

自分と他人とは違うことを意識し、自身の長所や短所も鮮明になる時期です。ありのままの自分を受け入れられず、混乱しても多くの子どもたちはやがてそのすべてを受け入れ、自分の役割や位置を獲得、安定への道をたどります。親や教師は思春期の不安と混乱をよく理解し、温かく見守ることが求められます。

最後に、発達に飛び級はないと言われます。子どもたちにしっかりと愛情を注ぎながら、発達課題を乗り越えていくのを見守っていききたいものです。

今月のひとこと ①

～ 関係が教育する ～

「相談は、まず、面接で信頼関係(rapport)をつくるのが大切である」「相談がうまくいかどうかは、相談者と来訪者の間に、何でも話せる。何でも聞いてくれる。何を話しても大丈夫という信頼関係がつかれるかどうかにかかっている」「この信頼関係がつかれば、相談は、100%成功すると言っても過言ではない」

「すなわち、関係が相談する。関係が治療するのである」

「教育も同じで、関係が教育するといえる」と強く思う。

先生と児童生徒のよい教育的な関係は、親しい友達関係という横の関係ではなく、慕われるという縦の関係であるべきであろう。

児童生徒から、「何でもよく知っている。何でもできる」と、専門(知識・技能等)の強さを尊敬され、人柄の良さ(明るく、優しく親切熱心、公平等)で親しまれる。

この尊敬と親しみが組み合わさったときに「慕われる」という関係ができる。

授業改善・指導技術 25

～ 授業で使えるカウンセリング その1 ～

授業で使えるカウンセリングとは、対話が授業の中で展開されていることです。具体的には、聞いている子どもの身になりながら授業を進めていくという意味です。従来のティーチングに教師の対話力(コミュニケーションスキル)を加えることにより、教師のプロ性がアップすると考えています。

授業場面でのコミュニケーションスキル(5つの言語的技法)

① 受容技法

「なるほど」、「うんうん」とうなずいたり相槌を打ったり、「それで」と促しながら、受け止めること。

② 繰り返し技法

「〇〇が●●」と子どもが言えば、「●●なんだ」と単語や「〇〇が●●なんだ」と短文を繰り返す。肯定的なキーワードを繰り返すのがコツ。

③ 明確化技法

「要するに〇〇ということですね」と子どもがうすうす感じていることを教師が言語化(言葉に)してあげること。

④ 支持技法

「がんばったね」「私も同感」と子どもにエールを送り、励ますこと。

⑤ 質問技法

子どもは、自分が言いたいことよりも、教師が聞いたことに答えてしまう傾向があるので、子ども自身が自分の問題が整理できたり、自己盲点に気づくような質問を心がける。

授業場面でのコミュニケーションスキル(6つの非言語的技法)

① 視線(アイコンタクト)・・・気持ちを伝えるとき、読み取るとき

② 表情・・・言葉にふさわしい表情をしないと相手に伝わらない

③ ジェスチャー・・・体の動きのこと、身体言語

④ 声の質量・・・例えば、怒鳴り声ばかりでは聞き手はイライラ

⑤ 言葉づかい・・・分かりやすい言葉を使う

⑥ 服装・・・目に見える分かりやすい非言語、状況に応じて

一学級経営と授業で使えるカウンセリング(ぎょうせい)

編集代表 諸富祥彦より

学級経営のヒント 24

～ 教室の環境経営のポイント その3 ～

◆ 掲示物等の配色・美化 ◆

① 壁のよごれや落書きは、拭き取るか、添付物を利用する。

② 教室前面には、赤・黄・蛍光色等の刺激的な色は避け、落ち着いた色を使用する。(気持ちが不安定にならないよう)

③ 自然の変化に対する豊かな感性を身に付けさせるよう季節感を生かした掲示や美化に努める。

◆ 教材・教具、黒板 ◆

① 使用頻度を考慮しながら、機能的に、活用しやすい置き方を工夫する。

② 前面黒板は、学習に使うことを大前提とし、月日・日直・当番など以外の貼付や文字の記入はできるだけさける。

③ 背面黒板は、児童生徒がおおいに活用できるようにする。